

新刊紹介

「蝶の学名—その語源と解説—」平嶋義宏著, ii+i+ii+i+269 ページ; 1987年7月10日発行. 九州大学出版会. 3,400円. [1988年2月4日第2版発行]

動植物の学名を構成する古典語について書かれた解説書は、かなり古くから何種類も出版されているが、ある特定の群を包括的に取り扱ったものは、とくに動物関係ではひじょうに少なく、分類学に携わる研究者にとって大きい障害になってきた。われわれ日本人にとってことに厄介なのは、ギリシャ語に由来する学名で、ラテン語化の規則も簡単ではなく、複合語のつくり方もむずかしい。それで、最近に発表された学術論文のなかにも、ギリシャ語とラテン語、あるいはラテン語とギリシャ語を組み合わせた好ましくない学名、いわゆる混成語が散見されるし、連結母音の使い方にも誤りが少なくない。

ところが昨年になって、たいへん有用な書物が2篇あいついで刊行された。そのひとつは、内田清一郎、鳥崎三郎共著の「鳥類学名辞典」(ii+xix+1207 ページ; 1987年3月31日発行; 東京大学出版会)で、世界の鳥類すべての学名の意味を解説したものであり、他のひとつが、ここに紹介する上掲の書物である。昆虫の関係者には、鳥類よりも蝶類の方が馴染み深いばかりでなく、大きさも価格も手頃であるうえに(ちなみに「鳥類学名辞典」は22,000円)、解説も親切で使いやすい。

内容は5章に分けられているが、主体となるのは第2章「蝶の学名」で、全体の7分の4を占める。日本産の全部と国外産の重要な属がアルファベット順に配列され、その性、語源、命名の由来などが要領よく記述されている。また、それぞれの属に含まれる種名の語源と、形容詞の場合などの語尾変化が示されている。これらの解説の大きい特徴は、複合語の語源が構成分子の単語まで分解して説明されていることで、著者の意図するところが単なる意味の解説ではなく、新しく学名を造語する人にも役立つようにという構想であったことをうかがわせる。このことは、第1章「学名の基礎的知識」をみるとさらによくわかる。ここでは、国際動物命名規約の学名構成に関する条項を引用しながら、チョウばかりでなくさまざまな動物の学名を実例に挙げて、どのような名称が学名として望ましいか、どのような名称がたとえ好ましくなくても学名として使われているか、属名の性を決めるにはどうすればよいか、新しい学名を造語するときにはどのような点に留意すべきか、などの問題が、ていねいに説明されている。この章を通読するだけでも、学名そのものについての知識は大幅に増えることだろう。残念なのは、複合語の前節と後節とを結びつける方法、とくに連結母音に関する事項が欠けていることである。問題が複雑なうえに例外も多いので、省略された著者の心情はわかるが、一通りの解説ぐらいは欲しかった。学名の発音に関する片仮名表記(第2章)にも気になる点は少なくないが、アクセントの位置が示されていないので、これはもともと無理な作業なのだろう。なお、第3章から5章までは参考書や索引にあてられ、第4章の種名索引には学名の意味が併記されている。

この労作は、チョウの学名の解説という体裁をとってはいるが、甲虫類の研究者にも十分に役立つものである。ハチ類の著名な研究者である本書の著者が、題材にわざわざチョウを選ばれた理由は、おそらくこの類が手頃な大きさの一群であるうえに、学名の変化にも富んでいるからだろう。初版の不備を補った第2版が最近に出版されたが、初版本の購入者には「第2版での改訂事項一覧表」を無料で配布される由である。この機会にぜひ座右の書とされるようお勧めしたい。

(上野俊一)